

武蔵野日曜聖書講筵

主の御用

— マタイ伝第21章1～11節 —

1959年6月7日

小池辰雄

武蔵野幕屋 魂の問題に帰する 一如の世界 福音書は書物ではない 驢馬の代わりに王位を得た 平和の君が驢馬に乗ってやってくる 罪からの解放 神の必需品 真理の体現者 私を背負いなさい 十字架・復活の奥義 主は我を要す 我また主を要す

【マタイ21】

1 彼らエルサレムに近づき、オリブ山の辺なるベテパゲに到りし時、イエス二人の弟子を遣さんとして言い給う、² 『向の村にゆけ、頓て繋ぎたる驢馬のその子とともに在るを見ん、解きて我に牽ききたれ。』³ 誰かもし汝らに何とか言わば「主の用なり」と言え、さらば之を遣さん』⁴ 此の事の起りしは預言者によりて云われたる言の成就せん為なり。曰く、⁵ 『シオンの娘に告げよ、「視よ、汝の王、なんじに來り給う。柔和にして驢馬に乗り、輓を負う驢馬の子に乗りて』⁶ 弟子たち往きて、イエスの命じ給える如くして、⁷ 驢馬とその子とを牽ききたり、己が衣をその上におきたれば、イエス之に乗りたもう。⁸ 群衆の多くはその衣を途にしき、或者は樹の枝を伐りて途に敷く。⁹ かつ前にゆき後にしたかう群衆よばわりて言う、『ダビデの子にホサナ、讃むべきかな、主の御名によりて來る者。いと高き処にてホサナ』¹⁰ 遂にエルサレムに入り給えば、都挙りて騒立ちて言う『これは誰なるぞ』¹¹ 群衆いう『これガリラヤのナザレより出でたる預言者イエスなり』

●武蔵野幕屋

少しく表面的なことを申し上げておきます。キリスト教も目下さまざまであります。ローマンカトリック教もあれば、ギリシアカトリック教もあれば、プロテスタントはたくさん宗派があり、また日本には内村鑑三先生をもって始まる無教会という宗派ならざる一つの流れもあります。私は、この内村鑑三先生の無教会の流れに育った者です。

私の旧制高等学校、大学時代に内村先生の集會に初めて加わり、それから先生の高弟である藤井武先生に先生の亡くなられるまでの5年間、無欠席の出席をもって親しく学びました。またその後、塚本虎二先生という——今、東京で一番大きな集會をもっていますが、



この方も内村先生の門下です。今、新約聖書の詳しい翻訳をしておられる方です。聖書学者としては日本で第一流の人です——そこでも数年学びました。内村、藤井、塚本という三先生に学んで、1940年からここで独立の集会をこうやって開いているわけです。

私も、大きくいえばもちろん無教会です。けれども、特にこれを「幕屋」と称している。

「武蔵野幕屋」

という名のもとに皆さんと集会を開いているわけです。なにも新しく自分が何かを始めたとかというわけではない。私の気持は、ここは、精神は、どこまでもこの聖書の根源の事態に立ち帰ることによって限りない前進をしていきたいと、それだけです。どうせ、人間のすることですから、いろいろ欠陥がありますし、破れがあります。決してこれがいいなんて毛頭思っておりません。

ただ、善きものはナザレのイエス・キリストだけなので、このキリストとこの福音だけが私にとっては善の善なるもので、その他は別に大して問題にならん。そういう世界に限りなく入っていきこうというわけです。

人間の形成していくところの特殊性というものは、これは止むを得ないし、また大いにあっていい。けれども、問題はみなその自己に、特殊性に執^{しゅう}するからいけない。

「無教会主義」

というのは、これに執し、執着する。またそれを主張し主義主張としていく。私はその「無教会主義」という表現と、ややもするとそれに付いているところのその精神には反対なのです。言葉は言葉で表現すると、どうしても逆説的になります。主義のない主義であり、立場のない立場であると言うよりほか仕方がない。

● 魂の問題に帰する

それはどこまでも主体がキリストであり、聖書であるので、こちらはその主体によって捕まえられるところの客体です。そういった角度で皆さんが聖書を読まれるときに、聖書を研究するのではない。もちろん、研究なさって結構です。ギリシア語、ヘブライ語を勉強し、参考書を読まれて結構です。私もやっております。けれども、研究によって聖書がつかめると思ったら、これはとんでもない間違いです。

聖書は、いわゆる学問的認識によってつかむ世界ではない。これは全存在をもってこちらがつかまれる世界である。全存在をもってこちらが呼びかけられる世界である。聖書の現実が主体で、ドラマで、そのドラマの中に自分を投げかけていく。決して傍観しているのではない。全身をもって投げかけていく、知的認識ではなくて体認^{たいにん}していく世界、身体でもってこれを認識していく世界だということを、新しい方は先ずよく肝に銘じていただきたいと思う。

私は、一切の文化の根源はそのような人間の魂の態度から出発すると信じております。



日本人はさまざま優れた才能をもつていながら、なぜそれが根源的な展開をしないか。また、社会のいろんな問題がたくさんあります。今度の参議院選挙のひとつの事態をみても、惨憺たる世相です。そういったことをみても、在り方の根源が、魂の根源が、どうしても真理に対する本当に謙虚な魂から大きなズレをきたしているということに問題の最後は帰着するのであって、一切の問題は魂の問題に帰する。人間の営む一切の問題は魂の問題に帰する。魂の問題は、魂を本当に救い上げるところの世界にこななければどうにもならないので、これこそは聖書が与えてくれる世界です。一番大事な最も根源的なものを与え開示しているという世界を、

「それだけは御免こうむります」

というのが一般の日本人である。

昨日も、私はある会合に行きました。お互いに話し合った。音楽学校の教授をしている方です。ヨーロッパの音楽を、特に古典をとりいれているときに、どうしてもぶつかるのは宗教のことだと言う。実に音楽の中に、ベートーヴェンでもモーツァルトでもバッハでも、キリスト教がそこらしみこんで出ている。それを本当に自分が味わうことなくして、一般に音楽、音楽とやっつけているけれども、どれほどそれがズレているかということをしみじみこの頃は思うと。それで、どうにもならないと言うんです。キリスト教のことを知らないものだから。それで、私はその人といふとつぷりとお話しました。

ヨーロッパの文化の花咲いているその根のところはみなそうなんです。私は学校でゲーテの『ファウスト』を読んでもありますが、ゲーテなんていう魂は完全に聖書にひたっている魂なので、そこから溶けてメタモルフォーゼ（変質変貌）を起こして、彼の文学に花咲いている。

● 一如の世界

そういう意味において、本当のものはみな、ヨーロッパのものはそういったところから出発しているし、また、東洋における素晴らしいものは仏教の世界から大いに出ているわけです。東洋人としての仏教に対する認識も極めて重要なことです。

この二つの二大宗教で、さてどちらを選ぶか。それはまた歴史が必ず証明していくでしょうし、また、私個人の体験からして、私は仏教と比較研究したわけではありませんけれども、福音の世界に深く入ってみたら、仏教のものを少しかじってみていかにこの福音の世界が素晴らしい世界であるかということに——仏教も素晴らしいことはわかるけれども——やはりこの福音の内実が限りなく素晴らしいことによりよ思いをいたすんです。

けれども、ヨーロッパのキリスト教がいわゆるヨーロッパ・キリスト教神学、ヨーロッパ的知的な認識の角度でキリスト教が相当分析的に把握されている。その点でまた向こうの人が、近頃は東洋の思惟に——中村元さんの『東洋の思惟』という非常にいい本がある——そう、私は読みたいと思つてますけれども——心ひかれて、東洋的な思惟の仕方、考え



方というものはどういふものかということに、心ある人はかなり気持ちを向けているらしい。ゲートなんていう人はもう根源的にはある東洋的な要素も持っていた人です。

東洋的な思惟の非常に大事なものは、一如の世界から展開していくような思惟の方法です。向こうは、分析して総合していくような弁証法的なやり方ですけれども、こちらは直観一如の世界から限りなく展開していく。どちらの要素も大事なんです。だから、もはや東洋とか西洋とか言っているときでは実はないので、文明の世界から言っても、東西は実に距離が短くなっておりまゝです。精神的な面から言いましても、もつと東西というものが本當にそれぞれの特色というものをどのようにして東洋人は生かしていくか、西洋人は生かしていくか、ということが問題になってきた。

もはや、対立ではなくして、真の融合の世界へと進んでいかなくてはいかんと思う。その精神的な流れが本當に大きな動きになっていけば、戦争というような問題ももつと根本的な解決へといくのではないかと思えます。

そういった意味において、福音というものがどれほど素晴らしい包括力をもっているか。普通、

「キリスト教の信仰に入ると、キリスト教という一つの枠の中に入ってしまったて、おおよそ文化的なものに対しては非常に幅の狭い人間になる」

と思つていますが、とんでもない間違いです。私の小さな体験からいいますが、実に福音の世界に入ったら、これほど無限な世界はない。一切のものを包括していく世界であります。キリストが、

「天の父の全きが如く全かれ」

と、私たちに一番おそろしい、素晴らしい要求をしておられることの意味もわかる。

そういうようなわけで、この福音の世界に本當に入っていけば、いかに福音は限りなく一切のものを正しい意味において生かしていくものであるかということに、特に若い方が気がついていただきたいと私は切に思う。

たまたま、このような小さな集会ですけれども、とびこんできた方々は、あなた方がいかに大きな将来を約束されているかということに自覚していただきたい。決して、私はこんなただ小さな集会を守っているんじゃない。皆さんと一緒に限らない抱負をもつて進みつつある。私はどこで仆れるか知りませんが、私も偉大な抱負を持っております。あなた方もそれぞれそういった気持ちで向かっていただきたい。

正直、今のキリスト教界がいろいろな意味において行き詰まりをきたしている。そして、いろんなものに接してみても、やれやれと思うんです、正直。それはやはり小さな自分の主義とか、自分の信仰とか、自分の教派とか、自分の教会とか集会とか、そんなものに執っているからです。

どうか、ここに入ってきた者は、あなた方は、ゲートではないけれども、マクロコスモ



スを映し出すような魂に、即ち大宇宙を自分の中に包蔵するような魂になっていたと思う。そんな気持で私はこの聖書に向かつておりますし、聖書はそれ以下のものではない。私の考えるよりかもっと素晴らしいものである。聖書一卷は、世界に何億の書物があっても、この一卷にはかなわない。若い方は思い切つて大胆にまた勇敢にこの世界を進んでいただきたいと思う。

●福音書は書物ではない

最近、ヒルティさんの著作集が白水社から出ていますが、もう既に七巻出ております。全八巻が全十一巻に延長されました。これは特に若い方に私は——決して宣伝でも何でもない——ぜひお読みになるようにお薦めいたします。これからあなた方が学ぶところのものは、また聖書への——いわゆる註解ではないですよ——聖書の傍らに読む本として、私はやっぱりヒルティは第一等だと思う。その意味において、実にヒルティは「百世の師」です。そういった本で、決して教派とか何とかというものに囚われてない実に珍しい方です、このヒルティという人は。

今度の翻訳の中の『病める魂』という中にナポレオンの言葉が引用してある。ナポレオンもついにこういうことを言ったかと思つて、私は非常に驚いた。ナポレオンがセントヘレナに流されて、かきこで何もやることがない。彼は、実に英雄の末路セントヘレナであります、そこで手にしたものは一卷の聖書である。そして、彼はこう言っている。

「『福音書には不思議な力がある。言つにいわれぬ作用力がある。心を魅すると同時に理性にも訴える或る温かさがある。福音書の内容にふかく思いをひそめると、まるで空でもながめているときのような気持になる。福音書は書物ではない、行動能力をそなえた生きものである。」

という実に気持のいい言葉がある。

「行動能力をそなえた生きものである」

とナポレオンは言いました。私はおそらくナポレオンが発した言葉のうちで最も注目すべき最後の言葉ではないかと思う。福音書の前にナポレオンもついに——あの力、行動能力のあった人です。英雄として行動能力は実にナポレオン以上の人はなかったくらい。シーザーとナポレオンでしょうね。ヨーロッパを席卷してしまった——その行動能力のあったあの英雄がついにセントヘレナの孤島で、「行動能力をそなえた生きものである」と、福音書を読んでそう言いました。これは福音書についてのいろんな註解書よりも実に端的に福音書というものを表現している。福音書は即ち生き物であつて、これにぶつかつて生きなければ本ものでないというわけです。福音書は読む本ではない。聖書は読む本ではなくして、これによって生かされる本であるということことです。

そしてその普及に反対するすべてのものを引きさらつてゆく力さえ持つている。



福音書にいくら反対しても、これにはかなわない。自分もついに負けたということですが、ローマの誰か皇帝も、

「ついにナザレのイエスに負けた」

ということを遺言にして死んだのがいましたね。

この書は特にこの私の机の上におかれてある。私はくりかえしこれを読んで倦まないであろう。毎日、私はおなじ喜びをもってこれを読む。

キリストは語る、かくしてもろもろの世代は、血のきずなよりもさらに緊密な、さらに深く、こころこまやかなきずなによって彼に属するのである。彼は愛の炎を燃え立たせる。これによって、何よりも強力な利己自愛は打ち滅ぼされる。

キリストの愛によって利己心は砕かれてしまうというわけです。

われわれは、彼の意志のこうした奇蹟から、この世の創造的な言葉を読みとらずにはいられない。キリストの最大の奇蹟は、疑うべくもなくこうした愛の国である。あらゆる時間的な限定を打ち破って、人間の心を眼に見えないものへと高め、かくして天と地との間に不壊のきずなを創ることができたのは、ひとり彼のみである。

「天地を貫いて、世の末まで生きる力をもっているものはただキリストだけである」と。素晴らしい告白です。

なぜなら、心だたくキリストを信じる者は、すべて、こうした不思議な愛、自然を超越する高次の愛、単なる人間悟性をもってしてはいかんともしがたい現象である。こうした不思議な愛を感じるからである。それは、この新しいプロメテウスによって

あのギリシアの神話の、火を呼び出したというプロメテウス。それに対して、「新しいプロメテウス」というのはキリストのことです。

地上にもたらされた聖なる火であって、偉大な破壊者である〈時〉でさえも、それを消すことはできないのである。

「偉大な破壊者でもこの火を消すわけにはいかない」

ということですが。続いて、ナポレオンは自分自身との比較を試み、次のような言葉で結んでいる。

全世界で愛され、畏敬され、説教されるこのキリストの永遠に生ける国と、この私の

ひどいみじめさとは、ほんとうになんといつちがいであろうか。』(ヒルティ著作集第8

巻『病める魂』より)

ナポレオンがついにイエス・キリストの前に全く降参した。しかしながら、そのような降参したナポレオンだからこそ、私はやっぱりナポレオンという人の魂にはまた実に素晴らしいものがあつたと思う。これだけのことが見える人ですからね。彼の生涯がマイナスであっても、最後のナポレオンのこの言葉で、私はナポレオンという人の、ある非常にいいものにつづかった。ナポレオンはそもそも私は嫌いですがけれども。この最後の一言は



素晴らしい言葉です。

そのようにこの世の最大の権力者もついにナザレのイエスの愛の力にはかなわない。即ち、このキリストは、

「敵を愛せよ」

とは、事実、彼は敵を愛して行った。キリストを否む者もついに最後には、その前に降参すれば、本当に救われて喜びの世界に救い上げられる。そういつたことでありまして、もはや理論の世界ではない。理論で証明する世界ではなくて、事実をもって証する世界がこの福音の世界です。

私たちは、人間の存在というものは決して知でもって解決する世界ではない。全存在をもってこれにあたっていかなければ、我々の全存在はどうにもならない。そういつた意味において、この聖書というものにぶつかっていただきたいと思います。新しい人も古い人も同じことです。

● 驢馬の代わりに王位を得た

それで、今日はマタイ伝の21章のところからです。これは、キリストが北のガリラヤの方から下ってきて、いよいよエルサレムに入城する第一日の、エルサレムにおける一週間の初日のところですよ。

1 彼らエルサレムに近づき、オリブ山の

エルサレムの東の方にあります。橄欖山ともいう。

辺ほとりなるベテパゲに到りし時、イエス二人の弟子を遣つかわさんとして言い給う、

「ベテパゲ」というのは「いちじくの家」という意味です。

2 『むかい向の村にゆけ、やが頓てつな繋ぎたる驢馬ろばのその子とともに在るを見ん、解きて

我に牽ひききたれ。』3 誰かもし汝らに何とか言わば「主の用なり」と言え、さ

らば之を遣つかわさん』

と言って、遣わされたわけですよ。イエスというひとはもちろん特別な神の霊の方でありますので、普通の人にはわからないものが見えている。驢馬がちゃんとつながれていることが見えている。時々、世の中には不思議な人がいて、透視のきく人もありますが、もちろんキリストはそういった透視力も持っておられた。その人がどういように答えるか、どういようにするかということもちゃんとわかっている。

驢馬という動物は聖書に非常に出てくる。聖書辞典によりますと、驢馬という言葉が聖書に150回くらい出てくる。驢馬の記事でもしるいはサムエル前書の9章のところですよ。

ベニヤミンの族に——イスラエル十二支派の一つです——キシという人があって、力のなかなか大いなる者であった。そのキシにサウルという息子がいた。なかなか大男だったらしい。サムエル前書9章3節から、



「³サウルの父キシの驢馬ろば失せぬ。キシその子サウルにいいけるは、一人の僕わかものをともしない起ちてゆき驢馬を尋ねよ。⁴サウル、エフライムの山地を通り過ぎシヤリシヤの地を通りすぐれども見あたらす、シヤリムの地を通りすぐれども居らず、ベニヤミンの地をとおりすぐれども見あたらす。⁵かれらツフの地にいたれる時サウルそのともなえる僕にいいけるは、いざ還かえらん恐らくはわが父驢馬の事をおきて我等の事を思い煩わん。⁶僕これにいいけるは、この邑まちに神の人あり、尊き人にしてその言うところは皆必ず成る。我らかしこにいたらん。かれ我らがゆくべき路をわれらにしめすことあらん。

靈感の人がいるからと。それでは、その人に一体何をお礼したらいいか。こんなものを持って行こうなんて相談しまして、

⁹昔イスラエルにおいては人神にとわんとてゆく時は、いざ先見者にゆかんといえり。そは今の預言者は昔は先見者とよばれたればなり。

サウル時代の予言者というものは、後に出てくる預言者とはちよつと質がまだ低い。いわゆる予言的な人です。本当の預言者という、後から出てくる「預言者」というのは神さまの言を承つてそれを民に伝える者で、何も将来のことを予言するということではない。将来のことを予言するのはただその一部分の話で、預言の大事なことは、人間がいかに生くべきかを神に示されて、これを言うことが預言者の極めて大事な仕事です。彼らは非常に倫理的であった。道念の非常に強い人たちでした。それで、その「先見者」の所に行つてみようと、その神の人のいる邑に行つた。

¹¹かれら邑まちにいる坂をのぼれる時童女わかきおんな数人の水くみにいづるにあい、之にいいけるは先見者はここにおるや。¹²答えていいけるは、おる視よ汝の前におる、急ぎゆけ……

と。サムエルという先見者——サムエルというのは素晴らしい人ですが——預言者サムエルにでつくわした。そしたら、サムエルはこの驢馬の話ではないです、今度は。神さまが、サウルという男が驢馬を見つげに来るということをサムエルにちゃんとさとしてある。

¹⁵エホバ、サウルのきたる一日まえにサムエルの耳につけていたまいけるは、¹⁶明日いまごろ我ベニヤミンの地より一箇ひとりの人を汝につかわさん。汝かれに膏あぶらを注ぎてわが民イスラエルの長となせ、かれわが民をペリシテ人の手より救いください。わが民のさけび我に達せしにより我これをかえりみるなり。¹⁷(サムエル前9:3～16)

と。そういう神の声をこのサムエルは既に聴いている。驢馬を尋ねて行つたサウルが驢馬を見いださないで、膏注あぶらがれるメシヤ——「膏注がれたる者」というのは「メシヤ」ということ。それをギリシア語でいえば「キリスト」ということです——膏を注がれる人になった。即ち、イスラエルの最初の王者にさせられる。だから、よく言う言葉に、



「驢馬の代わりに王位を得た」

という諺ことわざみたいな言葉がある。驢馬の代わりにサウルは王位を得てしまう。神の御旨を受けて、国を統治するものとしての王者です。イスラエルの王者というものは、

「神の御意みこころを、天に成る如く地にも行わん」

というのが王者の理想なんです。メシヤの理想というものは、天意を

「御意の天に成る如く地にも成らせる」

ということが王者の本当の任務なんです。そういう意味において、サウルが第一のイスラエルの王にたてられるわけです。サムエルという人にこういう不思議なことで選ばれて、そして膏を注がれる。預言者サムエルに按手されて、神の霊が彼の上に臨む。そして、

「汝は何をしてもいい。お前のすることはすべて正しく神の御意に添うことになる」

というようなわけです。

「我が思うところのりをこえず」

と孔子が言いましたけれども、わが思うところ、わが為さんとするとところが神の法に従うことになる。そういうサウルになった。これはサムエル前書10章のところに大事な言葉が書いてあります。

「⁶その時神のみたま汝にのぞみて汝かれらとともに預言して変りて新しき人

とならん。⁷これらの徴汝の身におこらば手のあたるにまかせて事を為すべ

し。神汝とともにいませばなり。」(サムエル前10・6～7)

「手当たり次第にやつてみる。神さまはお前と一緒にいるから、大丈夫。間違いは

ないぞ。神の霊がお前に臨んできたから」

というわけであります。「新しき人」、新人となる。このヘブライ語は「別の人」と訳してもいい。新人、別人となる。

「人新たに生まれずば、神の国に入ること能わず」

とキリストが言った。この「新たに生まれずば」とはこのことです。

「神の霊を新たに受けずば」

ということですよ。

そういったわけで、驢馬を見つけに行つたサウルが——王位ということよりも大事なことは——神さまの御霊みたまを見つけてしまったわけだ。サムエルを通して御霊を賜ってしまった。そのこともちゃんとサムエルは示されているんですから。素晴らしい事態です。

そういった別人、新人。私たちのこの人生においても、その時は偶然と思われることが、しばらく経つてみると後から、実にそこには神の導きがあったということに気がつく。そういうわけで、皆さんの人生航路には、自分がその時に自覚しなくても、不思議な導きというものが来ている。



●平和の君が驢馬に乗ってやってくる

キリストが驢馬に乗って入城してくるということは、旧約のゼカリヤ書9章のところにちゃんと預言されている。キリストはもちろんこういふところを読んでいるので、それを自分の身にしかと体現されたわけです。

「9 シオンの女よ大に喜べ、エルサレムの女よ呼われ、

「シオンの女」も「エルサレムの女」も同じことです。シオンという名前とエルサレムという名前を両方とも持っています。「女よ」ということは「市民よ」ということです。「シオンの市民よ、エルサレムの市民よ」と。「東京の女よ」ということは「東京市民よ」ということです。

視よ汝の王汝に来る。彼は正義しくして救を賜り柔和にして驢馬に乗る。即

ち牝驢馬の子なる駒に乗るなり。

詳しいことが書いてある。「牝驢馬の子なる駒に乗るなり」と。キリストがマタイ伝21章2節においても、「驢馬とその子がいる」と言われたんですが、その驢馬はギリシア語では牝でも牡でもどっちにもとれる言葉です。牝驢馬でも牡驢馬でもいいですが、その子なる駒に乗ってくるという。

驢馬は荷物を背負わせたり、一般の乗用に使ったり、いろんなことに有用な動物です。牛、羊、驢馬というのはよく出てくる。ことに驢馬はやっぱり愚鈍なんですね。愚鈍な愚直のようなものが驢馬に例えられるわけですよ。「うさぎ馬」なんて言われて耳が長いらしい。小さくて乗りやすいらしい。ちよつと滑稽ですよ。マンガみたいな存在ですが。キリストはそれに乗ってやって来ることは後に書いてある。

10 我エフライムより車を絶ち、エルサレムより馬を絶ち。

「車」というのは戦車のことです。「馬」は軍馬のこと。

戦争弓も絶るべし。彼国々の民に平和を諭さん。その政治は海より海に及び

地中海よりアラビアのカリブ海にまで至り、

河より地の極におよぶべし。」(ゼカリヤ9:9～10)

「河」というときには大体、ナイル河のことをいう。即ち、その当時の全世界にその平和は及ぶぞという預言です。戦争は止んでしまおう。戦車も焼かれてしまおうし、軍馬もなくなってしまうというようなわけです。そういった、

「平和の君が驢馬に乗ってやってくる」

というこの言葉をキリストは自分の身に引きつけて、それをいよいよエルサレムへ自分は平和の王者として臨むというわけで、驢馬に乗って行く。

その驢馬がちゃんと備えられているのをキリストはあらかじめ見てしまった。何もしめし合わせなんかしていない。

「とにかくあそこにあるに違いないから、それを神さまは私に示したから、それを



解いて来なさい」

と。

「何だ、お前は人のものを解くか」

と、もしその驢馬の主人が聞いたならば、

「これは主の御用なんだ」

と言いなさい。そうしたら、きつとそいつは渡してくれるよと。こういう話です。

● 罪からの解放

「解きて我に牽ききたれ」

という言葉がある。私たちはみな繋がれているんです。ある人は芸術につながれている。ある人は学問につながれている。芸術に囚われ、学問に囚われ、あるいは事業に囚われ、健康に囚われる。私もいつか病気になって胃腸をこわしたときに薬に囚われまして、今日ほどの薬を飲もうかと、いろんな薬を飲んだ。机の上に薬を並べてみたり。薬に囚われるうちは病気が治らん。それで、ある時、薬をすっかりやめた。薬から解放されたら、それから不思議に身体が丈夫になってきた。

「ではもう、薬はこんりんざい止めます」

なんて、方程式みたいに考えなくたっていいけれども。薬はもちろんなるべく善用すれば結構です。

囚われるという、その囚われから解放されなくてはいかん。どんな善きものでも、それに囚われたら、それが偶像になる。学問も芸術も事業も健康も何もかもすべてこれが偶像になってしまう。せつかく善いものが今度は逆にその人を、本当の展開をさせなくしてしまう。魂はどこまでも囚われない自由であることが大切です。だから、

「繋がれてあるところのその驢馬を解いて来なさい」

と。「解きて我に連れきたれ」というこの言葉を読んで、私はなかなかこれは味があるなと思った。

「キリスト教」という表現、「教」というのは私は嫌いなんです。私は教養学部なんていうところに勤めています。キリストはお説教をしない。私もキリストの精神に学んで、皆さんにお説教してない。私は告白している。私はお説教する資格がない。告白だけです。ナザレのイエス・キリストも実はお説教ではなかった。

「釈迦の説法」と言うけれども、お釈迦さんも本当はあれは説法でなかったと思う。止むに止まれずして発する言葉が人をうつので、教えようとして発する言葉は人を拘束しますから、嫌ですよ、そういうものは。

このあいだ早稲田大学の教室に入ろうとしたら、誰がいたずら書きしたか、「狂師の入口」なんて書いてあった。生徒の入る所には「聖徒」と書いてあった(笑)。私はきつそく、



「ああ、君たちは聖徒だから、私が勉強しろと言わなかったって、ちゃんと勉強することはもう君たちが自ら証明しているから安心したよ。私は、狂師と言ったって、これは『真理のために狂えるなり』とパウロが言ったとおりだ。普通の狂とは違うんだ」

と言ってやりました(笑)。

罪からの解放ということ。即ち、罪でなくても、そういった善きもの、人間の作りだす一切の善きものにも囚われたらダメなんです。ここに画家が二人いるけれども、始めは絵に囚われていたから、どうもうまく進展しなかった。この頃はもう絵に囚われない書き方になったから、お二人ともそれぞれの角度で展開を始めた。キリストの福音にだけは本当にこれはとらわれなければ。福音にとらわれることは一切のものにとらわれないということになる。そして、一切のものを本当の意味において自主的に支配していく。支配ということは、なにも威張るということではないですよ。最もよい意味においてそれを善用し、それを展開させていく。

「民主主義」とか「自主」とか言うけれども、神さまの前に本当に奴隷になるまでは、民主だの自主だのと言う資格はない。そんなことをして、人間それ自身を絶対化しようものなら、それこそ自分というものに今度は囚われる。いわゆる自己に自由なものは自己に囚われる。これはヒルティさんの詩の中にもある。

「本当の自由の価値というものは自由に死ぬことにある」

とヒルティさんその詩の中で言っている。人間の固有の自由なんていうものに死ななければ、この大自由の中には入れない。仏教の坊さんたちが悟りを開いたのはみんなその境地です。

●神の必需品

「解きて我に連れきたれ」

という。私たちも解かれて、キリストのもとに連れきたらされる。キリストのもとに連れきたらされるのは、何のためかという、今日書いたように、主の御用である。「主の御用」という言葉は実は原語では、

「私はそれを要するのだ。私はそれが必要である」

という言葉です。「それ」というのは驢馬がそこに二匹いますから、複数になっていますけれども。

「主は彼らを要し給う。主は彼らを必要となさる」

と。神さまは、

「キリストは私たちを必要とする」

というんです。このダメな仕方がないものを必要となさる。皆さん一人びとりは、我々は



神の必需品である、必要物である。我々の存在は神が必要とされる。

少し極端に言えば、神さまが欠けているものだから、神さまがこれを要するということがない。神さまは何か仕事をなさろうとするときに、私たちを使って、この不完全なしようがないダメな者を使って、神の御意をなそうとする。皆さんは、私たち一人びとりはみな、神さまは必要としているんです。何のために必要かというのと、神の聖なる意志を行ぜんがために、私たちを必要としておられる。

必要としているのは、何が必要であろうか。私は神さまのどういう御用にたつだろうか。これはそう簡単にはわからないかもしれない。それは毎日生活しながら、祈りながら、

「神は私の生涯を通して何をなさんとしておられるか、どういうことをしようとしておられるか」

と。毎日必要なことがあります。また、全生涯を通して、ある一つのことをしようとしていらつしやることがある。毎日その時その時に自由自在に必要なにお使いになるし、また全生涯を通して、その人でなければならぬ必要なことをさせようとしておられる。それが芸術であろうと、学問であろうと、事業であろうと、台所で働くことであろうと、何であろうと。病人を看護することであろうと、会社で勤めようとして、何をしようとして。それは究極の意味においては、

「神の御用のために自分があるんだ」

ということですよ。

●真理の体現者

神は真理の主体であります。

「我は道なり、真理なり、生命なり」

とキリストが言われたが、キリストは即ち、神の真理の体現者であり、神の道の具現者であり、また神の生命の発現者であります。即ちイエス・キリスト自身は、

「自分は何ものでもない。ただ私を通して神さまが為し給うんだ。顕れ給うんだ」と言っている。

「我を見し者は父を見しなり」

というのは正に、キリストは普通の言葉でいえば「狂師」ですよ。狂っている。「我を見し者は父を見しなり」なんて、普通の人だったら、これは気違いですよ。神の子であるから、この狂師は本当の先生ですよ。

キリストはその体現者です。私たちはまたキリストにおいて顕れているこの神の事態を、キリストを受けとることによって現す。芸術に執着していたものが芸術を突き抜けてしまつて、そして本当に今度は芸術を祝していく魂になるから、そこにおいて表れるものは万人に訴えるような芸術となつていく。芭蕉の俳句がそうではないですか。彼が本当に無私の



境地に入つて、禪宗の悟りの世界に入つて、

「古池や蛙とびこむ水の音」

といえ、万人に何かしらんが訴える神秘的な句が出てきた。そういうのが真理の体现です。何も仏教を説明しているのではない。禪宗を説明しているのではない。禪宗というものが彼の魂の中に溶け込んでくれば、真理が自然にその俳句らしい世界で発現していく。皆さんのする学問でも何でも、また仕事でも何でも、みなそのような臭みのない本当の在り方が出てくる。

大地の中にある養分がそのまま植物の葉に出てますか。葉には大地の中の養分のいろいろなものがそのまま出てはきませんよ。それは完全に消化されて、太陽の光と一緒に一つ青々と葉が出ています。みんなそれぞれ「メタモルフオーゼ」を起こして変質、変貌してそこに現れている。けれども、受けとつているものは本ものである。これは造花ではない。どんなに虫がくついても、これは本ものです。

私たちはどんなに虫がくつたような存在でありましたが、しょうがないやつでありましたが、

「そこに本ものが生きていますかどうか」

が問題である。その本ものが生きていけば、必ずその本ものが私たちダメな存在をだんだん栄化していく。これは天来の力、天来の生命だから、必ずそれが勝っていく。これが勝つていくことを信ずるといふことはもはや理屈ではない。

私はどんなことがあつても——人間小池なんていうものはどう言われたつて、私は弁解の余地がないけれども——

「私の中に発現するところの神の事態は、必ずそのように最後にはされていく」

というこの確信ならざる確信は上から来ている力で、恩恵であるから、これは仕方がない。事実であるから。世界中の人が否と言つても、私はそれに対して否と言わざるをえない。

このキリストの真理を受けたあなた方一人ひとり、クリスチャンがそれだけの張りをもつていないならば、もう信仰の世界はやめた方がいい。

「自分の信仰」

なんて、そんなケチ臭いことを言っているうちは。

「クリスチャンは力がない」

なんて言うのは、みんな私しているからです。信仰の世界も私しているからいかん、絶信の信の世界に入らないと。絶信の信は正にキリストが私たちをして、信仰は計算したつていかん、

「無限なるキリストを本当に受けとりなさい」

というわけです。



●私を背負いなさい

「御用なり」と言つて、神さまがこんな者を必要としていらつしやると聞いたら、あなた方は感激しませんか。

「へえー、神さまはこんな者を必要しているのか。けれども、必要とされたのでは、私はとても耐えられません」

なんて思う。神さまが必要とされるときには必ず実力を与えてくださる。神さまは決して空手形で私たちに、人間の教師みたいに空手形で命令なんかしませんよ。神さまの命令というのは必ず実力が伴っています。

「安心して来なさい」

と言う。だから、教えではない。キリスト教ではない。これは福音、喜ばしき音信おとずれである。どこまでも喜ばしき音信であります。

「主の御用と言え」

という。そして一体、この驢馬は何の御用ですか。驢馬はキリストを背負う御用を、キリストを担う御用を与えられた。この愚直なトンマみたいな顔している驢馬は、キリストが何のためにどこへ行くかは知りませんよ。けれども、この驢馬は驚くべき天界の王者を担わせられた。一番バカな暢気のんきな存在が一番素晴らしい者を担わせられた。

私みたいなダメな者に、

「キリストという素晴らしい方を担え。驢馬がやったじゃないか、お前もできるよ」

と。キリストを担うと、今度は逆に私たちに、

「わが荷は軽し」

と言うんです。「我という荷は軽し」だ、今度は。キリストは「我が荷は軽し」と言われた。私の負わせる荷物は軽いよと。いや実に、キリスト自身が私の荷物になつて、

「私を背負いなさい」

と言われる。キリストという荷物は軽い。何となれば、キリストという荷物は、メシヤというこの主という荷物を背負いますと、これが背中に乗つかると、逆に力が与えられる。だから、軽い。キリストを担つたらば、これは荷物は軽い。力が無限に与えられる。ヒルティが『眠られぬ夜のために』の3月30日のところで、

「巨人キリストフォロスの如く、断固としてただこの世の最大の主にのみ仕えねばならぬ。さてその最大の主とは今日、物質的進歩と享樂であるか、学問であるか、芸術であるか、あるいは祖国とその代表者（国民または統治者）であるか、あるいは人道であるか、教会であるか、それとも神とキリストであるか。

これについては自ら決定せよ。しかる後に、正しくかつたましいを尽してこれに仕えよ。」

と、ヒルティは半分、反語的な言葉をもつて言っている。もちろん、ヒルティが言うところ



ろの「この世の最大の主」というのは「神・キリスト」のことです。けれども、それが物質であろうと、享樂であろうと、学問であろうと、芸術であろうと、あるいは祖国とその代表者であろうと、人道であろうと、教会であろうと、皆さん、勝手に選ばなさいと。そしてまあ、やってみるがよろしい。悔いなきかどうか、というわけです。「クリストフォロス」については註がつけてあって、

『第三世紀の伝説的巨人で、『キリストを担う者』の意。生まれたのはシリヤ、或る隠者に導かれて改心し、神の愛を体現せんとて、橋なき川の渡守となった。或る日のこと、一人の幼児を背にして川を渉り始めたところが、川の真中にさしかかるや、その小児の重さが遽かに増して、さしも強力な彼が一步も進めなくなった。その小児こそキリストの顕現であった。その場で彼は洗礼を受けた。それは彼の平生の愛の労苦に対するキリストの応酬であったと同時に、彼が殉教の死を遂げる予告でもあったと思われる。彼は手に持っていた杖をその地中に植えるように告示された。翌朝その杖は棕櫚の樹となっていた。彼はカトリック教会では、渡守や航海者の、また急の厄災の守護聖者として憶えられている。』

まあ、伝説的な人物でしょうけれども。とにかくしかし、そういった愛の労苦をしていた人が、何かそういった物語ができるような不思議なことに与かったのではありましよう。

●十字架・復活の奥義

キリストを担うということは、私たちができないことをしろうと。しかし、できない者に、「できないことをさせてやる。できないことが必ずできるようになる。何となれば、私が汝の上にある。即ち、私がお前を負う力となる」と。担っていたらば、それは負う力となる。

「十字架は重いけれども、しかし、この十字架を担ってみたところが、実は自分は逆に十字架に担われた」

というような詩をまたヒルティさんも歌ってましたね。3月13日のところですよ。

「十字架は重い、けれども不思議だ、

それがきみを担っている。きみはそれをほとんど担わなかったのに。

最初は真つ暗だ。けれども終末に

真昼が待っている。——そこへ到る路の名は「断行」。

我らの力微なりとはいえ、きみの托身している

主の力は偉大である。

きみの星は闇の夜に輝よつている

「今日」に死んだね——「明日」は生命だよ。」

そういう詩です。



それ自体は重いですよ、このキリストは。即ち、

「己が十字架を負いて我に従え」

とキリストは言われた。己が十字架を負うと、私たちは十字架は負いきれない。十字架の下でぶつ倒れてしまう。私たちは、十字架を負うといったって、これは負えない。十字架の下でぶつ倒れてみると、逆に今度は、そのキリストの十字架が自分を担ってくれることに気がつく。

十字架の下にぶつ倒れるということは、とにかく一遍、人間は本当に生まれつきの自分というものが倒れてみないと、本当の立ち上がりというものができない。これが死生の転換ということ。即ち、「倒れる」ということを別な言葉でいえば、死することであり、またそれは真に砕けることであり、真にそれは無私となることでもあります。

私たちは力んでいる。力んでいるけれども、自分の力みではどうにもならないで、そこに倒れている。いや実に、キリストを負ってみたら、キリストの十字架でキリストと共**に**ぶつ倒れるような世界です。

「キリストを負うと一遍倒れて、そして今度は逆にキリストによって立たしめられていく」

と言うとなおそれがハッキリします。力が来る。力が来るが、いよいよ力が来るといふことは、いよいよ自分に対して無力となるということ。キリストのいよいよ無限力とな

「限りなく自分に対して無力となるということが、キリストのいよいよ無限力となっていく」

ということ。自分のaという力に、プラスAというキリストの力が、大きなAという力が、入ってくるのではない。これが一遍、倒されて、そして、倒されたこのaの何か無限の定数みたいになって、この大きなAがかかってくるようなわけですよ。

これが即ち、

「主の御用となつてキリストを担う。キリストを担つて一遍本当にキリストにぶつつぶされてみると、今度は本当にキリストを担つてキリストと共に歩く」

ということになる。

それはもう一つ言い換えれば、キリストの御霊みたまが私たちの中に入ってきて、自分で立てないところのこの我というものが無にされた。私たちの中は、キリストの十字架によって我というものが無にされて、十字架によって我というものがはずされてしまった。私たちの問題は何かというと、この自我というやつでしょうが。この自我というやつをすつ飛ばすのが十字架でしょうが。

キリストはなぜ十字架にかかったか。彼は、どうにもならないこの私たちを、

「もう、お前は、一切の魂の問題は、それがいくらあつたって、それはもう解決済みだ。心配はいらん。私が全部それを背負ってしまった」



と。キリストがまず私たちを背負ったんです。キリストは十字架で私たちを背負いましたから、私たちはもう軽くされている。我というのは、すつ、飛んで、いるんです。

そうしたならば今度は、復活のキリストが私たちの中に入ってきている。一遍、キリストの十字架ですつ飛ばされた我、倒れたる我はこの復活のキリストの生命が入ってくるから、立ち上がるから、今度は本当にキリストを軽々と担うことができる。何となれば、キリストの力がその中にきているから担えるんです。

これが即ち、本当に「主の御用」となつて行けるところのゆえんです。驢馬が本当に勇ましく進んでいける。驢馬みたいな私があね。ここに即ち、十字架・復活の奥義があるわけです。十字架・復活の奥義は、身をもつてこれを受けとり、自分が本当に驢馬となつて、キリストの力と智慧によつて進んでいくわけです。

●主は我を要す

エルサレム入城においては、その時に群衆が非常に喜んで、驢馬の上に衣を乗せたり、その路に衣を敷いたりして、大いに凱旋將軍のようにしてこれを歓迎し進んで行った。「ダビデの子」というのは、理想のメシヤたる者ということ。ダビデは理想的な王さまでですから「ダビデの裔^{すえ}」という。「子」というのは「裔」ということで、やがてイスラエルの独立をして、この地上に政治的にも神の王国を建設していく。ユダヤ人は今でもそれを夢みている。

「キリストは預言者ではあるけれども、あれは間違えた。まだ本当のメシヤという者はこれからやつて来るんだ」

と、ユダヤ人はそう思っている。イエスをメシヤとはしない。

イエスは、しかしながら、この世の王者として来たのではない。

「わが国はこの世のものならず」

と。神の国の支配者です。そして、やがてこの地上に、歴史の終末に最後の神の国が現ざること待っておられる。我々の知らざる天界に君臨しているわけです。群衆はその天界の、霊界の王者として来たこのキリストにみな躓いてしまった。この時は大いに歓迎して、

「ダビデの子にホサナ、讃むべきかな、主の御名によりて来る者」

と言つて、預言者としてこれを見た。けれども、キリストは彼らが躓いていることは御存知でしょう。やがてイエスは十字架にかかることはもうちゃんと見当がついている。それは弟子たちに既に語っておられる。

本当の平和は、神の御意^{みこころ}が現ざるところに平和があるので、神の御意が現じないような所には、人間の工作の世界になんか本当の平和は来ない。これはもうわかりきっている。キリストはついにユダヤ人に躓かれて、十字架にかけられてしまった。そういった悲劇的な入城です。群衆もついに、祭司長や学者・パリサイ人たちに煽動されて躓いてしまった。



私たちが担わせられているところの「御用」、必要とされているところのこの主は、実は本当の意味において、すべての文化を展開していくところの根源の主であるということですから。ところが、同じく文化の世界で——政治的にもそのようにユダヤ人に躓かれましたが——今度は文化の世界でもキリストは躓かれています。人間の作りだしたいろいろな文化には讃仰さんぎょうするけれども、

「福音だけは、宗教だけは受けない」

と言つて——この福音はいわゆる宗教とは違う——「これだけは」と言つて受けない。実は文化がみな徒花あだばなであつて、さきほどの詩篇103篇の中にもあつたように、すべて萎んでしまふような徒花です。本当に実を稔らせていくような文化ではなくて、花が咲き実が稔らない。それはこの主に躓いている。真の意味においてこの主が私たちを必要としておられる。何のためにかという、それぞれの人々を通してさまざまものが多種多様に展開して大きな調和をなすためです。そういう意味においてキリストは一人ひとりを本当に必要としておられる。

我々はキリストによつて必要とされているが、今度は逆に、我々はまたそれだけキリストを必要とするわけです。私たちの魂は、「主の御用」であるが、今度は我々は主を要するんです。我々は主を要する。キリストを要する。なぜかという、彼は真理であり、生命であるからです。真理であり生命であるこの根源の真理、根源の生命、飲めば渴くことを知らないところの水、真に飽くことを知るところのこの義であるからです。

「幸いなるかな、義に飢え渴く者。その人は飽くことを得ん」

と。この「義」は「正義」ではない。キリストという義ですよ。神さまの御意が体現している事態を義という。神さまの御意が体現しているこのキリストという義を必要として、これを求めるならば、真に飽くことを得る。私たちは真に満ち足りている。満ちたりながら、限りなくそれが満たされていく。満ちたりつつ満ちされていくという、こういう世界です。そういうキリストを私たちが必要としている。一番大事な糧を、キリストという根源の生命を吸い、飲み、この光を浴び、その愛の生命をもつて貫かれるということが信仰の事態なんです。この生命に浸り、この光を浴び、この愛によって貫かれるという事態が本ものにならないものだから、いわゆる信仰がいつまでもダメなんです。

●我また主を要す

蚕かいこは桑の葉をながめて生きてますかね。蚕は桑の葉をバリバリ食べて、まるで雨の降るような音がする。蚕というのは他のものを食べるか私は知らないけれども、どうも桑の葉しか食わないようだ。即ち、蚕は桑の葉を食うことによつて、あの素晴らしい絹糸に変えていく。変質、変貌へんまうさせていく。蚕にとつては桑の葉は絶対に必要なものです。桑の葉を食わなければ絹糸はできない。しかも、蚕というのはおもしろい。あれは大体、四回くらい眠つ



ては脱皮するような話です。あの蚕は眠っては脱皮する。静かな死のごとき眠りの世界に入る。そうすると、脱皮して、新しい生命に伸びていく。蚕自身が死生の転換を四回もやる。食べるものは桑の葉ばかり。

私たちが、聖書が蚕の葉みたいなのに、私たちににとっては聖書は毎日桑の葉だ。もちろん、私たちは聖書ばかり読んでおしまいではない。何を読んでもいい。映画を見ても何でもかまわない。しかしながら、聖書という桑の葉を食べていると、他の何を食べても、本当の消化ができる。聖書という桑の葉を食べてないで、他のものを食べると、これはみんな不消化で下痢を起こしてしまう。消化不良になる。これはハッキリしている。聖書は他のものを本当に消化させるところの葉でもある。これは万能の葉だ。聖書というのはもつとも素晴らしい栄養物であると同時に、最も素晴らしい葉である。

だから、聖書という葉でありかつ食物を食べていると、他のいろんなものを読んでも、その中からちゃんとすき分けて、それが害のあるような本でも、ちゃんとそれからすき分けて、変質させてそれを消化してしまう。あなた方若い人が聖書を読まないうちに、いろんなものを多読していると混乱に陥るでしょ。けれども、聖書を読んで、それから他のものを読んでいけばいい。

だから、ヒルティさんが、

「朝起きた時に一番先に新聞を読むな」

一番先に聖書を読めと言う。一番先に聖書を読んで、魂の一番大事な滋養を得ておいて、それから新聞でも何でも読めば、そいつは消化する。そういうようにヒルティは書いてないけれども、「まず新聞を読むな」というのは、ヒルティの気持はそうです。

朝、聖書を、また夜寝るときに聖書を読む。朝は新約聖書、夜は旧約聖書でもいい。とにかく、あなた方はひとつ実行してみてくださいよ。聖書に親しまなければいかん。私は学校でドイツ語の生徒に

「ドイツ語に親しみなさい」

と言っている。そういうように、聖書に親しみ読むと、他のものは消化していく。それは私たちは蚕より素晴らしい人間だもの。人間だから桑の葉ばかりでない。聖書を読めば、実はもうある意味においては、こればかり読んでいると、一杯この中に入っている。たとえば、今午後にダンテを読んでいられるけれども、ダンテとかゲーテとかの大作を読むと、小さなものをたくさん読むよりか、はるかに多くの真理がその中に含まれている。それを熟読玩味した方がよっぽどためになるし、ああいうものを読むと、応用力や創造力が出てくる。

いわんや聖書においてをや。いくらダンテのゲーテのシェークスピアのと言いましても、これは聖書にはかなわん。みんな彼らはこの聖書からその源泉を汲みとっているんだから。そういう素晴らしい書である。決して、拳々服膺せよなんていうそんな教えの堅苦しい本



ではないですから。

私たちは聖書を、神さまの御言みことばを必要とする。御言は理解するのではない。食べなくては。それは蚕に負けますよ、人が。蚕はながめてなんかいない。桑の葉をバリバリ食べている。私たちは聖書をバリバリ食べているかというのと、食べていないです、クリスチャンは。クリスチャンは本当に聖書をバリバリ食べているか。羊ではないけれども。聖書の文字をバリバリ食べて、

「私は読んでいるうちに力が入ってきました」

という読み方をしないならばダメですよ。それは申し上げているとおり、文字の奥の世界に、この現実の中に魂を投じ込む祈り心地で読まなければ、これはダメです。

まあ、それはやってみてください。私も50歳になってやっと気がついていているような始末ですから。あなた方は20のときからそのことに気がついて始めれば、もう50位になれば大変なものです。もう眩くてしょうがない(笑)。どうか、そういうようになってくださいよね。もうあと30年、私は生きているか知らんけれども、あと30年もし生きていたら、あなた方は眩くて見えないような人物になっている。

遠慮なく進んでいただきたい。私はしんがりから行きますから。主が必要としたもうならば、いよいよ私たちは主を必要とし、この聖書を必要として、食わざるを得ないものとして進んでいく。そうしたらば、乗っている主と驢馬というものは全く一体で、いくら走っても、

「鞍上あんじょう人なく鞍下あんか馬なし」

というような始末ですね。もう主と驢馬とは一体で進んでいく。本当にそこで共に、

「我汝を要す、神の栄光のために」

「我また主を要す、神の御意が現れんために」

というわけです。そうしたらば、皆さんが何をしていても、そこで決して付け刃ではなくて、本ものが現れてくる。そういう本ものになるために、私たちはこの世界に入っているわけです。どうか、そんな気合いで進んでいただきたいと思うわけです。おしまい。

